

柔らかい色合いが視界を包み込む。美がそのまま具現化されている。同じ絵画でもこうも違うのか、と最近訪れた「鈴木其一展」との違いを真っ先に体感する。

私は日本的な美意識が好きであった。19世紀、鈴木其一が描く花にはそれが具現化されていた。彼は完璧な美のみを表現しない。枯れかけた花をも描く。そうしてもう一度、最盛期の花を見るとその輝きが増す。朽ち果てる未来をもつからこそ、目の前で咲き誇るそれが美しいとわかるのである。桜が美しいと感じる心も、それが日本人の儂さに対する潜在的な美意識に繋がっているように思う。

一方、目の前の西洋を代表する名画たちはどうであるか。私には完全なる美への執着を感じずにはいられない。人間の身体も風景も、目の前で完結されている。小林秀雄の「花の美しさがあるわけではない。美しい花があるのだ。」という言葉が、この美術館展で何回も繰り返し私の耳元で唱えられた。その通り、そこには現実の光景よりも美しく描き出された絵画が並べられていた。描き手には世界がこのように見えているのであろうか。その”目”が羨ましくてたまらない。「美を感じる心は、完全なる美が目の前に存在しないことから始まる。」そう考える私を、軽々かわしていく西洋の名画たちが皮肉たらしかった。

私はここで、あるひとつの、美のかたちを魅せられた。